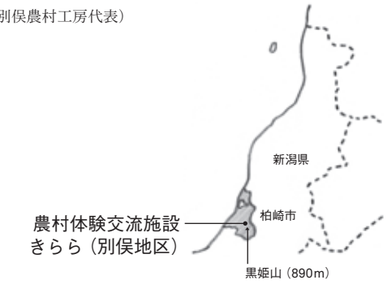
ついに廃校！ どうしよう……〈思い出校舎〉活用への道？

新潟県柏崎市・農村体験交流施設「田舎の学校 きらら」（旧別俣小学校）

文＝桑原勝一（別俣農村工房代表）
写真＝鈴木千佳

思い出の学校が消えるとき、
校舎の存廃をめぐって地域が揺れる。
残すといっても、どうする？
合意形成、施設設備、活用法……。
そんなカベにぶつかるたびに、
むらの〈絆〉が一段と深まり、
ピンチがチャンスに変わっていく。



残すか、壊すか？ 賛否をめぐって地域は大揺れ

新潟県柏崎市の中心から13㎞、別俣地区は久米・水上・細越の3集落からなる小学校区。黒姫山の麓にのびる盆地に120ヘクタールの水田が広がる人口450人、150戸の農村部です。

過疎化、少子化がすすむなか2002年、創立131年の別俣小学校の廃校をめぐって、住民と市の教育委員会の話し合いがはじまりました（中学校は1990年に廃校）。2000年に入って児童数が40人を割るようになってからは、誰もが廃校の日を迎えるものと覚悟はしていました。

しかし、問題は市内に唯一残された築60年の木造校舎の存廃です。教育委員会からは、活用策がないことや維持管理にかかる財政負担の面から、一貫して校舎の解体・撤去の方針が出されていました。「別俣には観光名所や旧跡もない。せめて木造校舎をふるさとのシンボルとして次世代に残したい」と、私（桑原）も含め地元有志の「別俣を考える会」[注]は、行政や議会に対して校舎の存続を訴え、集落への説明会をくり返しました。

賛成派がはじめから多かったわけではありません。存続2割、解体2割、傍観は6割という状況のなか、賛否をめぐって地域が大きく揺らいでいたのです。

解体派からは「今なら市が解体費用を全額負担してくれるが、将来処分するとなると住民の負担になる」「活動を途中で投げ出して朽ち果てる校舎を見るのは忍びない」など、資金や運営面から〈負の財産〉を残すことを危惧する意見が相次ぎました。

[注] 稲作兼業農家が多い別俣地区では、90年代後半から水田を委託するところが増えてきました。そこで米づくりを通して子どもたちにふるさとのよさを再発見してもらおうと、2000年にはじまった「田んぼの分校」がきっかけとなり、30代から70代の18人で「別俣を考える会」が自発的に結成されました。

桑原勝一さん（58歳）／柏崎市森林組合に勤務。1964（昭和39）年に別俣小を卒業

旧柏崎市立別俣小学校

開校：	1873（明治6）年
閉校：	2005（平成17）年
児童数：	最多時（1941年）253人→閉校時20人
活用開始：	2008年
活用形態：	農村体験交流施設
運営主体：	任意団体
賃貸料金：	無償譲渡